

〈やさしさ〉の闘い

栗原 彬著

せられ、一人一人がバラバラな働き手というより、歩き回っている「個」にさせられてきた。その疲れた人たちなのではなかったか。作っている現実の中から、それまでの日者はその手ごたえを、精力的に地

〈やさしさ〉の闘い

社会を良くするために必要な闘い



栗原 彬

だされるのではないか。

イデオロギーでもなく、信条でもないところで、個々の個人的な欲望やエゴを抱えたままで、しかし「様子を見るため

共生への新しい知恵を提示

共生やネットワークという言葉には危険なものがある。命は、他の生き物を食べることでつながっているすさまじい側面があるのに、何かしら「やさしい」関係ばかりを想起させてしまう甘さやごまかしがあるからだ。著者はそのことに気がついている。それでも今日という時代を考えると、この共生やネットワークへのイメージを欠かすことは出来ないと考ええる。なぜか。

本には見られなかった新しいタイプのつながり方が、少しずつ自覚されだしてきているのではないか。それが働き手(ワーカー)というより、歩く人(ウォーカー)のイメージから感じられる。阪神大震災で活動したボランティアも、

方へ出かけ、各地で知り合う人々との支流の中からも感じ取る。消費社会は欲望の時代だ。その膨れ上がる欲望は、満たすことも除去することもできず、「様子を見るながら」歩き回ること解消するしかないものにもなってきた

る。だからこの時代に「遊歩者」ウォーカーであることは、時代の生きるスタイルとして認めなくてはならないのではないか。そして、この「様子を見る」ために集まるウォーカーのスタイルに、

八〇年代以降の日本では、かつての共同性の感覚が急速に解体さ

著者が、この本で繰り返し共生やネットワークを語るのは、そういう地平を見ているからだということを言っておきたい。やさしさが「闘い」と題されているのはそのためだ。

る。なぜか。

（新曜社・二四七二円）

